別記様式第６

# 論 文 審 査 の 要 旨

| | | | |
|---|---|---|---|
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（ 文　学 ） | 氏 名 | 山　下　　須　美　礼 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第２項該当 | | |

論　文　題　目

東方正教受容にみる時代変容意識と地域

論文審査担当者

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　　査 | | 教　授 | 河　西　　英　通 |
| 審 査 委 員 | | 教　授 | 勝　部　　眞　人 |
| 審 査 委 員 | | 教　授 | 中　山　　富　廣 |
| 審 査 委 員 | | 准教授 | 太　田　　淳 |
| 審 査 委 員 | 筑波大学人文社会系 | 教　授 | 浪　川　　健　治 |

〔論文審査の要旨〕

本論は、日本北方社会を主なフィールドとして、近世から近代の連続性のなかで、「地域」に生きる人々が「世界」をどのように認識し、その上で行われたさまざまな営為を通して、「地域」がいかに変容・再編されていったかについて、東方正教（ギリシャ正教、組織としてはハリストス正教会）の受容のあり方を中心に解明しようとしたものである。本論は、序章、第一章、第二章、第三章、第四章、終章の全六章から構成されている。

序章では、従来の日本東方正教史を概観したうえで、中心人物のニコライに関する研究史をまとめ、ニコライのもとで受洗した信徒として旧藩士に注目し、彼らを「士族ハリステアニン」ととらえることで、本研究テーマの主体として位置付けている。

第一章「個別教会の成立と展開」では、青森県・八戸光栄教会の信徒名簿の分析から「士族ハリステアニン」と地域社会の政治経済の動向を（第１節）、岩手県・盛岡十字教会の金銭出納簿の分析から教会の財政的実態および物質的環境を（第２節）、宮城県・高清水顕栄教会の教会日誌の分析から教会と「士族ハリステアニン」の日常的な活動状況を明らかにしている（第３節）。

第二章「伝教区の形成と機能」では、仙台以北の教会連合体「顕栄会」をとりあげ、顕栄会のネットワーク、正教会公会とは独立性を保っていた「地方会議」の結成、公会との緊張関係などを通して、地域教会の自立性を実証するとともに（第１節）、その経済的背景としての教会による商業活動（物産移送販売会社）が明治政府による東北開発に呼応するものであったとともに、東北アイデンティティの発露であったことも指摘している（第２節）。

第三章「伝教の主体と受容者」では、「顕栄会」を素材に岩手県一関地方における伝教と受容のありさまを、血縁関係・教会設置過程などを追跡することで明らかにし（第１節）、東京以西への伝教についても東海道や鹿児島の事例を掘り起こすとともに（第２節）、伝教過程で発生した他宗派との関係について、北海道の神道教導職との対立構造を分析し、ハリストス正教会の存在が北方開拓社会において現実的な力になりつつあったと論ずる（第３節）。

第四章「士族ハリステアニンの背景」では、歴史主体としての「士族ハリステアニン」の形成過程を旧仙台藩士および旧八戸藩士をモデルに検討している。前者に関しては、彼らが単に武士として藩に仕えていたのではなく、地方知行制のもと、城下を離れて藩内の村々に与えられた給地の経営を通して、「地域」における支配者であるとともに、知識の集積主体としての役割を果たしてきた給人層であったことに注目し、習慣化していた知的営為が東方正教という新たな知的世界への関心に急速に傾斜していったことを指摘している（第１節）。

後者に関しては、台湾出兵や西南戦争への従軍志願、反政府活動（真田太古事件）、自由民権運動、族籍回復運動など士族たちの危機意識が、ハリストス正教会への志向を促したととらえている（第２節）。

終章では、近世においてロシアへの関心が高まっていた日本北方社会の「周辺」的性格とともに、「地域」における支配者・知識集積主体としての「士族ハリステアニン」に注目することにより、欧米型の近代化とは異なる下からの「ゆるやかな近代化」の可能性が存在していたことを指摘している。

本論は地域史料を広く調査収集分析することを通して、従来はニコライの活動を中心に描かれていたハリストス正教会史を在地の視点から大きく転換させるとともに、日本近世・近代の移行期を新たな知見から論ずるものとして高く評価できる。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500 字以内とする。